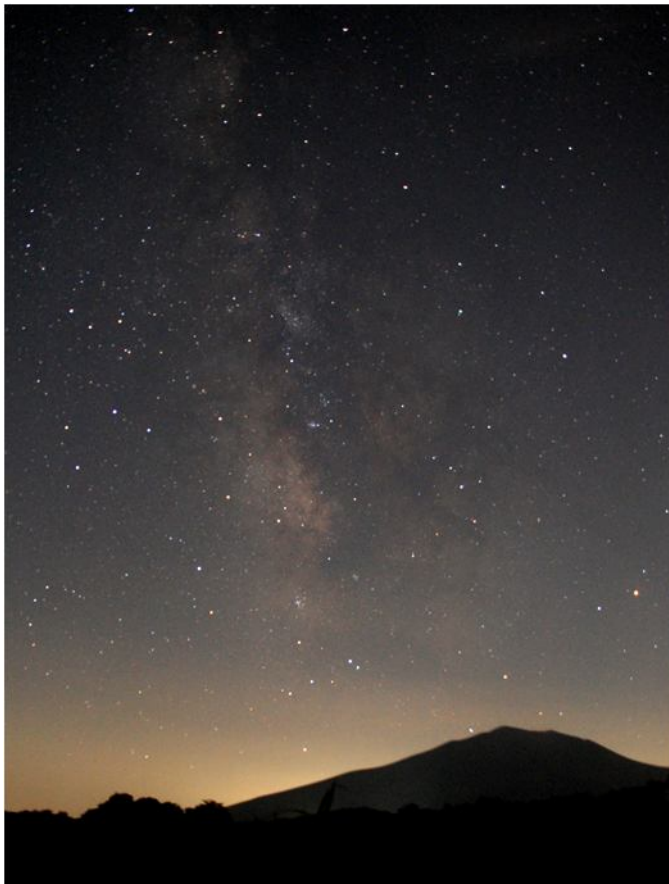


「天の川の明るさ」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

北軽井沢では、月のない晴れた晩なら、季節を問わず、星が非常によく見える。初めて天の川を観る、という人を牧草地に案内する、どんなにシーイングのいい晩でも、最初はどれが天の川なのかわからないことが多い。しばらく星空の下にいて、暗闇に目をならすと、やっとポーっとした光芒が、星空を横切っているのに気づく。夜間の非常に薄い雲に似ている。



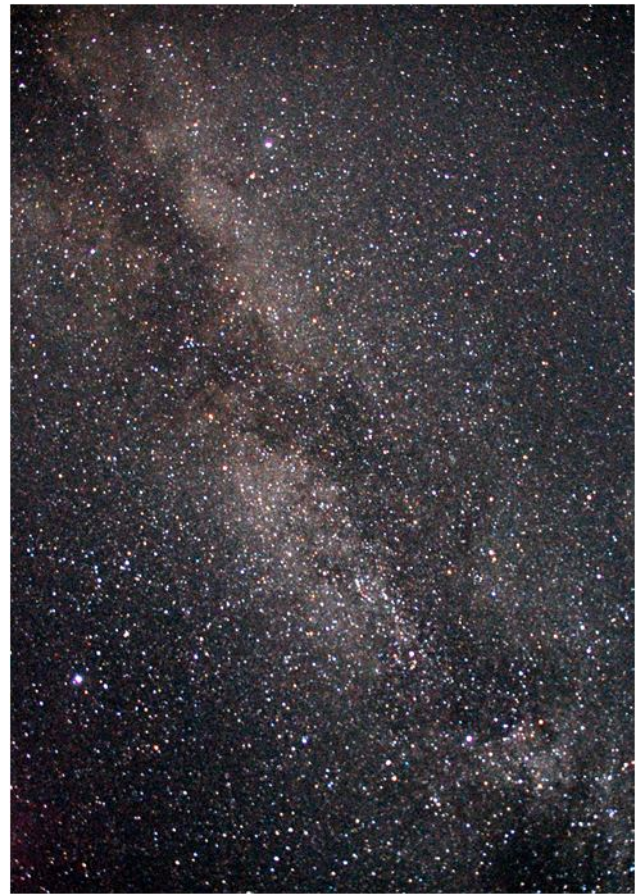
「浅間山と天の川 (いて座銀河)」北軽井沢 C.Tanaka

天の川やアンドロメダ星雲のように、淡い光芒を観察する場合、「そらし目」という方法が有効である。これは、観察対象を「直視」せず、少しずれた場所に視点を置く方法だ。ヒトの眼は、網膜の中心部よりも周縁部のほうが、暗い場所での感度が良い「桿体細胞」(かんたいさいぼう)が多いからだ。私の経験では、だいたい 10° ほど(腕を伸ばして、にぎりこぶし1個分)左右どちらかに視線をずらすと、淡い天体は格段によく見えるようになる。桿体細胞は、明暗の差に敏

感だが、色の識別はできず、形状もはっきり認識できない。しかし、もともと色も形もはっきりしない天の川の観望には「そらし目」が非常に有効である。

関東屈指の星空の北軽井沢で、こうした方法で天の川を観察しても、やはり「光害」の影響は避けられない。左の写真でも、浅間山の左側地平線付近の空が、明るく写っている。これは夕焼けではなく、軽井沢町や佐久市の街灯りである。もはや列島本土で、完全に光害のない場所は存在しないだろう。

しかし、オーストラリアやモンゴルの砂漠の真ん中では、人の営みの影響が全くない、「漆黒の闇」が存在する。月のない暗夜には、「天の川の光だけ」で、地面に自分の影ができるのがわかるという。すごい話だと思う。そういう場所に、是非一度行ってみたい。



「砂漠で見た天の川のイメージ」

これは砂漠で撮影したものではなく、北軽井沢で撮影した写真の、コントラストを上げたもの。モンゴルの砂漠では、肉眼でもこのように見えるのだろう。